



Title	「セメント樽の中の手紙」 英訳にあたって
Author(s)	Kobayashi-Better, Daniel
Citation	多言語翻訳 : 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』. 2013, p. 62-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61308
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「セメント樽の中の手紙」英訳にあたって

ダニエル・小林ベター

○翻訳する際に難しかった点（言葉、感情、文化、タブーなど）

「ちくしょう」のようなことばを訳すのが難しく感じられた。どの程度の厳しさの言葉に訳出すればよいのか、判断がしにくい場合がある。英語には様々なレベルの「curse words」（汚い言葉）があるが、労働階級の人を使いそうなものは、通常の小説には載らない。この『セメント樽の中の手紙』の先行の英語訳では、かなり軽いレベルの「汚い言葉」に訳されていて、読みながら、自分は「この人だったらもっといわゆる「four letter words」を使っているだろうに」と思った。しかし、実際に訳してみると、結局は、自分でもせいぜい「bloody hell」まででとどめることになった。

「立派にセメントになりました」は最も訳しづらかった。日本語としても違和感がある言葉を訳するのが、やはり難しい。

手紙の文章についても、書き手の感情を把握した上で翻訳するのが難しかった。日本語でもかなり大げさな表現を使ったり（「どうしてとめることができるでしょう！」）、主張を変えたりする（「（恋人の体の一部が入ってしまったセメントを）豪華な建物には使わないでください、と書いておきながら、またすぐ「どこに使ってもいい」と書いている）箇所などがあり、恋人を失った手紙の書き手（女工）の揺れ動く心情をつかむのが難しかった。

○先行の翻訳と自分の翻訳との違い（先行翻訳との間で工夫した点や、とくに留意した点など）

先行する翻訳よりも、やや多めの俗語を入れるように翻訳した。翻訳者（私）は、アメリカ英語の俗語にはあまり慣れていないため、一部イギリス英語の俗語で翻訳した。しかし、あまりイギリス英語を入れすぎるとイギリス出身ではない読者にとってはわかりにくくなる、という問題点もあった。

○自分の国には『セメント樽の中の手紙』と似たような小説があるか

労働階級の日常を題材とした小説としては、『オリバー・ツイスト』など、チャールズ・ディケンズの小説を思い浮かべる。しかし「セメント樽の中の手紙」のような残酷さはなく、むしろハッピーエンドになっている。

○翻訳対象言語において、『セメント樽の中の手紙』は理解してもらえるか

表現の点で言うと、たとえば、「男らしい人」という言葉には、英語圏の現代人の目から見ると少し違和感を覚える部分がある。現代では「強い男性像・優しい女性像」を評価する考え方が批判されるようになってきているため、「男らしい人」の表現が伝わりにくいところがあると考えられる。今回はそう訳しなかったが、「a manly man」のような表現だったら現代の読者にとってはむしろ滑稽に映る可能性すらある。

○日本ではこれは国語の教科書（高校生）に掲載されています。そのことをどう思いますか？

高校生はもう一步で大人になるところにいる。この小説の中に描かれるような残酷な場面に接する機会を与えてもいいのではないかと思われる。高校生なら内容を十分理解できると考えられる。